

浄土

monthly JODO

2015
February
March

2/3



蓮根

陶芸家
南
初枝
の
作
品

蓮根。作者は実用の箸置きとして制作した。作者行きつけのいくつかの西洋居酒屋で、実際に使われている。蓮根はインド原産。ハスの地下茎が肥大した物で、食用に栽培される。はすね、蓮茎、藕などとも書き、主に沼沢地や蓮田などで栽培される。

ご存知のように内部に空洞がある。いくつかの節に分かれているが、節の長さは品種によって異なる。輪切りにすると穴が多数空いていることから「先を見通す」ことに通じ縁起が良いとされ、正月のおせち料理にも用いられる。

旬は10月から3月までで、「蓮根（はすね）掘る」は冬の季語である。

顔あげてからかはれをり蓮根掘 高野素十
蓮根掘ぶすぶすと腰没したり 牧野寥々
(佐々木美冬)

撮影・芝崎慶三

浄土

2015/2・3月号 目次

連載 法然上人のお言葉⑩	梶村 昇 英訳 河西良治	2
滝田栄インタビュー 祈りの心を形にする (第2回)		4
連載 会いたい人 野村萬斎さん①	関 容子	14
連載 響流十方	袖山榮輝	22
蓮門句会		26
連載 友好の絆⑨	森 清鑑	28
連載小説 渡辺海旭⑤⑥	前田和男	36
連載 誌上句会	選者＝増田河郎子	44
連載 マンガ さっちゃんはネッ	かまちよしろう	47
編集後記		48

表紙・陶芸家 南初枝の作品

表紙裏＝表紙の言葉



表紙題字＝中村康隆元浄土門主
 アートディレクション＝近藤十四郎
 協力＝迦陵頻伽舎

法然上人のお言葉

ぶ法語

一念十念にて往生すといえばとて、念仏を疎相に申せば、信が行をさまたぐるなり。念々不捨といえばとて、一念十念を不定に思えば、行が信をさまたぐるなり。かるが故に信をば一念に生まるととりて、行をば一形にはげむべし。

(禪勝房にしめす御詞)

現代語訳——一遍、十遍の念仏で極楽に往生できるといので、それ以上の念仏を疎かに申せば、それは信心が、念仏の行を妨げているということである。念仏は一念々に救いがあるというので、一遍、十遍の念仏では、往生はおぼつかないと思うのは、念仏の行が、信心を妨げているということである。だから一遍の念仏で往生できると信じ、生涯念仏を励むべきである。

Honen Shonin's Sayings

If people, believing that one or ten nembutsus do not fail to lead them to the Paradise, utter others mindlessly, their faith obstructs their practice. In contrast, if people, believing that they attain salvation by each nembutsu at each time, doubt that only one or ten nembutsus will assure them of their birth in the Paradise, their practice obstructs their faith. Therefore, they should believe that one nembutsu is certain to lead them to the Paradise and apply themselves to the practice of uttering it in their lifetime. (The Words Honen Addressed to Zenshobo)

Commentary

The problem of the relation between faith and practice in the nembutsu has been persistently discussed ever since Honen's lifetime and even

解説

念仏における信と行との問題は、法然上人の在世時代から、やましく論じられ、今日でも浄土教内で論議されておりまゝです。それと、いうのも念仏を観念的、論理的に解釈しますと、必ず矛盾が出てくるからです。ここで法然上人は、一遍の念仏で往生できると信じて、生涯念仏を申しなさいと言っております。しかしこれは論理的にいえば、矛盾でしょう。一遍の念仏で救われるなら、何も生涯続けることはないと思うからです。

理屈で言えば、その通りだと思います。しかし実際に念仏を申し、てみれば、分かりますが、たとえ一遍の念仏で救われると信じて、その信は、すぐに退転してしまいます。凡夫の信は、そういうものでしょう。一度信じたならば、いつまでも退転しないというようなものではありません。信じ、退転し、また信じ、また退転する。こうしたことの繰り返しだと思うのです。このことを法然上人は、嫌というほど知っておりますので、「信をば一念に生まるととりて、行をば一形にはげむべし」と述べたのではないでしようか。信仰というものは、頭で考えるものではなく、身に体して信じるものだと思います。

now is being debated in the Jodo sect. The reason is that whenever the nembutsu is interpreted theoretically and logically, there occurs a contradiction. In the above quotation Honen said that people should believe that one nembutsu was certain to lead them to the Paradise, so they should apply themselves to the practice of uttering it in their lifetime. However, logically speaking, this saying will be a contradiction, because it seems to be reasonable to think that if they can be saved by uttering a nembutsu just once, they will not need to continue to utter it in their whole lives.

It may be theoretically true, but, as will be made clear by their actual practices of the nembutsu, even if they believe that one nembutsu saves them, their belief will decline very soon. This is just a matter of common practice among ordinary people. They cannot reach a state of mind where once they have believed it, their belief never declines. In fact, they believe it and their belief declines, and once again they believe it and their belief declines. Such a repetition will be a normal state in ordinary religious faith. Honen, who had deeply acknowledged the full truth about it, must have stated that people should believe that one nembutsu is certain to lead them to the Paradise and apply themselves to the practice of uttering it in their lifetime. I think of religious belief not as what we think out in our heads, but as what we believe through our own real experiences.

梶村昇

亜細亜大学名誉教授

祈りの心を 形にする

第二回

滝田 栄

インタビュー

聞き手 本誌編集部 佐山哲郎

たきた・さかえ

一九五〇年千葉県生まれ。文学座養成所から劇団四季を経て独立。

舞台「レ・ミゼラブル」の主役を十四年間つとめたほか、

TV「草燃える」「なっちゃんの写真館」「徳川家康」「マリコ」などの大作ドラマで活躍する。

一方「料理ハンザイ」の司会を二十年間つとめた。

二〇〇六年、映画「不撓不屈」で主演。

〇六、〇七年奈良薬師寺の伎楽「三蔵法師求法の旅」で三蔵法師役を演ずる。

俳優の仕事のみならず、執筆、講演など幅広く活躍。座禅、山歩き、陶芸を好む。

現在仏像制作に邁進中。

編集部佐山（以下S） 徳川家康を演じたときに、寺に籠って修行までなさった、ということにもビックリしました。

滝田（以下T） あれも、もう、家康という人がわからなくて藁にも縋る思いで。

S 家康はわかりにくいですよ。わからないです。他の武将のイメージは湧くんですよ。信長も秀吉も信玄も、やんちゃな少年時代とか。飛び抜けて利発だとか。でも「人の一生は重荷を負って遠き道をゆくがごとし、いそぐべからず。不自由を常とおもへば不足なし」の人ですからね。なんなんだろう、この忍耐は、どこから生まれたんだろう、とか。

T ずっと人質。それで人質として過ごしたお寺に行ったらなにか手懸かりがあるんじゃないかと思って、これでもしわからなかったら消えてしまおう、と考えて。

S 思いつめてしまう発想が凄いですね。

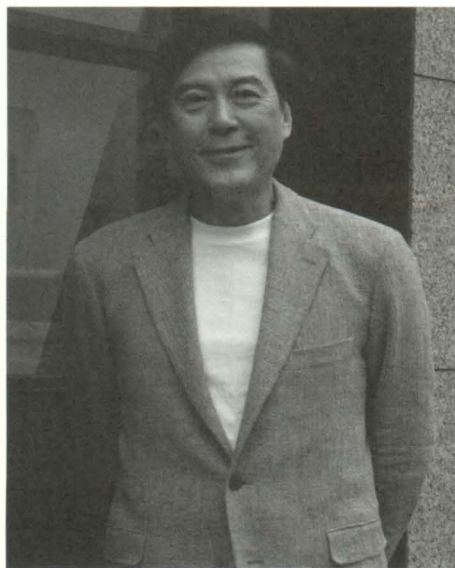
T そこまで追いつめられてしまうんですよ。ほんとわからなくて。

S なにかわかりましたか。

T いや、わからなかったですけども。静岡の臨濟寺という禪宗のお寺でして、食事をいただく前に修行僧が「五観の偈」という、「ひとつには――」。

S 功の多少を計り、彼の来處を量る。ですね。食作^{じきさ}法^{ほう}。私たちもお唱えします。

T あれをお唱えしていただく。たかがお粥ですよ。お湯のような。梅干一個と沢庵^{たくあん}で、なにを言っているんだろう、この人達はって。でも、よく考えたら、こ



れをいただくだけの行いを自分はしたろうか考えて、作った人、運んでくれた人、自分を育ててくれたすべての人に感謝して「いただきます」と。これは自分の精神修行、心を高める薬であると、謹んで「いただきます」。家康もこれを繰り返した。

S 家康の少年時代、竹千代と呼ばれていた頃ですね。

T そうです。家康はその竹千代の頃から生涯、一汁一菜なんです。他の將軍達は贅沢三昧。やりたい放題になっていくじゃないですか。それで人間五十年といわれた時代に七十三歳ですか、生きていますね。で、子供達にきちんと指示をして、世の中を見て、絶対に戦争を起こさない気配りをして。あ、これは臨濟寺での影響をかなり受けている。これは幼いときの食事の作法とか。禪宗のお坊さんで長生きなんです。百歳、百十歳、当たり前で（笑）。

S 仏教との御縁はその家康のことからなんです。

T そうですね。仏教というものに深く触れるきっかけとなったのは臨濟寺での家康探しの旅からでした。そのとき一緒に庭の掃除をしていた修行僧に「坐禅ってなんですか」と聞いたときに、「この庭掃除。これも禅です」と。実に気持ちのいい答えで、ああそういうことか。そのときに僕は芝居という、人間の情念とか煩惱を扱う仕事、理性では抑えられない心の動きを扱う仕事のなかで、いつか僕自身が掃除をするような作業が必要になるだろうな、いつか坐禅をすることになるだろうな、いや、やろう。と、決めたんです。そのとき一緒にした修行僧は、皆さんその後大きく活躍されていて、一緒に庭掃除をしていた修行僧がいまそのお寺の住職。阿部さんといって花園大学の学長もされた。

S 修行を一緒にした関係というのは特別なものです。同じような年齢でしょう？

T そう。僕の泊まっていた部屋に毎日「むさ苦しい部屋で申し訳ありません」といって

野の花を摘んできてそつと活けてくれる修行僧がいて、彼は大徳寺龍光院の小堀さんといつてね、野良猫を捕まえて目玉に眼鏡の悪戯描きいたずらがをする修行僧がいたんですよ（笑）。この人はいま沢庵和尚の東海寺の住職です。みんなもう凄く活躍されていて。なぜか、僕の友達はお坊さんばかりなんです。

S 一生の友情かも。私たちも加行道場けどうの同期というときすぐ親しみが湧きます。

T そうなんです。僕の方は、仕事の合間に、最初一週間、ひと仕事して戻って、またというふうにやらせていただいた。それでも家康がわからず、もうだめかと思ったときに、当時の住職、倉内松堂老師、後に妙心寺の管長になられた方ですけども、僕をお茶に呼んでくれたんです。

S 老先生が書生さんを呼ぶみたいな感じですね。

T ええ、ほんとに素晴らしいお話をしていただいた中で、最終的に竹千代に、家康の幼年時代ですけど、当時の太原雪斎禪師が教えたのは「お前はお釈迦様のような武将になるんだよ」ということに違いない。ここで教えることは他にないと仰った。

S 家康は浄土宗と縁が深く、松平姓のころからの菩提寺は三河の浄土宗大樹寺です。桶狭間の戦いときは今川方の人質だった家康が、逃げ帰ったのがこの大樹寺。

T はい。浄土教の例の「厭離穢土欣求浄土」えんりえとごんぐじょうどという言葉。穢土を忌み嫌って浄土を希い願うという言葉ですが、武将であるならば生きてこの世を浄土にしてみせるという、そうではなくて武将といえるのかと論されるんですね。

S のちの野戦の天才家康も、三方ヶ原は信玄にこてんぱんにやられちゃったから。

T 三方ヶ原のあと、その言葉を頂いて、もう一回やってみようと、それを旗指物にして戻っていくと、なんと信玄が退却をはじめ。実は脳梗塞で倒れちゃったんですね。天

がついに味方した。家康の生涯を思うと、これは作られた人だな、仏様によって用意された人だなと思うことがあります。

S そうも言えるかもしれませんね。

T 戦国が終わらなくなってしまう。長い長い殺し合いが、奪い合いが終わらなくなってしまうときに、その不幸な時代を終わらせることの出来る人材を用意しなくてはならない。三つの時ですよ。三つのとき、まず信長の父親信秀に人質に取られて、三、四年くらいいるんですよ。運が良かったのは、織田家の菩提寺に預けられた。そこで読み書き、仏教、儒学と、かなりの勉強をきちっと教えられている。

S 相当なる教養を身につけたんですね。

T 生まれる以前、家康の母親が鳳来寺の薬師如来にお参りするんです。不幸な時代を終わらせるほどの立派な武將をお授け下さいと。妊娠中ずっとお参りしたというんです。生まれたと思ったら織田に人質に取られちゃう。それで、次は織田家から今川家に売られちゃうんですよ。これがまた運が良くて、臨済寺の禅師のもとで十九歳まで。人間が成長するのに一番重要な物の考え方とか性格とかが決まる時期だと思うんですけど、そのときにただ人を殺めて権力を手にするような生き方ではなくて、人が生きる意味とか、死ぬ意味とかを深く洞察する世界に三歳から十九歳、それも立派な師匠について学ばされる。それで十九の時に桶狭間で今川義元がやられたときに解放される。そのときから家康の人生が始まる。師に教えられた不幸な時代を終わらせるために生きるのだと。他の武將達の人生の動機は私欲ですが、家康は違う。

S あの乱暴な信長でも、いつも一目置いているんですよ。まるで実の弟みたいだね。
T なんなんでしょうね。信長は家康に一目置いて「なんなんだ、こいつ」みたいな。

「あの心を動かしているのはなんなんだ」という目で見てますね。秀吉が利休を見ている目に似ている。やっぱり「こいつ、なんなんだろう」。まったく自分と違う価値観を持ち魅力を持っている。「こいつを動かしているのはなんなんだろう」。いずれも仏教観だと思うのですが、家康には大義と理念がありますよね。この不幸な時代を終わらせるといいう。無駄な戦はしない。勝ちすぎるな、というんですよね。

S 家康を演じることで大きく得たものがあるのですね。

T 演じることで、ここまで凄いい人なのかということを知って、その大本、家康の一番深いところには何があるんだろうということを探していったときに、あ、仏教だ、仏様だとわかったときには舞い上がるほど嬉しかった。大将になってやりたい放題やってやるんじゃないんだという。家康の生き様がわかったんです。

S 家康の前に大河ドラマ「草燃える」で伊東十郎祐之の役をやってらっしゃいますよね。この人の人生が波乱万丈、面白いですよ。

T あれも面白かったですね。演じていて自分で打ち震えるほど面白かった。

S 鎌倉時代の北条政子は手紙の遣り取りとか、法然上人と師弟関係があるんですけれど、祐之の最後は全盲の琵琶法師になってしまいうんですよね。

T 政子と義時と少年時代を共にした鎌倉の伊東家のお坊ちゃんなんですけれども、頼朝の当て馬に使われて酷い目にあって人間不信で怨みの世界、悪の世界に堕ちてしまう。最終的に少年時代の友人の義時に捉えられて、目玉をえぐられて野にうち捨てられる。そこで一旦ドラマからは消えてしまうのですが、最終的に義時と政子が遂に天下を治めたときに、彼らは虚しいんですね。頂点を極めたときに、あまりにも多くの人を殺して呆然としている。このときに評判の琵琶法師が町に来ているらしいと聞いて呼ぶことにする。義時

と政子が高台に座って、庭に莫塵を敷いて琵琶法師を座らせる。平家物語を吟ずるんですが、それがかつて目をえぐった伊東十郎祐之なんです。彼らに向かって「驕おごれる者は久しからずただ春の夜の夢の如し…」。これはね「お前たちのことだ！」って、心で叫びながらね。気持ちよかったですよ（笑）。だって義時が松平健ちゃん、政子が岩下志麻さんですよ。

S 『平家物語』に色濃く影を落とす無常観は法然浄土教の哲理に深く根ざしているんです。作者には諸説ありますが、私の調べたところでは、どの説を採っても法然上人ゆかりの門流であることには間違いないのです。私はむしろ作者複数説を考えているんですが。

T 要するに『平家物語』を初めて吟じた琵琶法師というのはどういう人間だったんだろうか、脚本の中島丈博さんが考えてくれたんです。エリートだけの物語じゃドラマとして面白くない。それで、あの時代に丈博さんが興味を持つのは、頂点を極めた人も面白いけど、『平家物語』が生まれた時代、『平家物語』を作って吟じた男というのはどういう人間なんだろうと考え始めたら、ドラマがどんどん動き始めて、ああなっってしまった。

S それでいいと思いますよ。『徒然草』によると信濃前司行長が作者、盲目の琵琶法師生仏しょうぶつがはじめて語りはじめた、となっていて、名が伝わっていますが、平家物語のあの壮大な叙事詩は、膨大な作者群の語り伝えで成り立って、時代を越えつつ伝わってきて、また伝えていくんだから。作者のひとりやふたり増えてもいいんです（笑）。

T 原作の永井路子さんが絶賛してくれまして、「原作を越えている」（笑）って。

S 永井路子さんは大本山増上寺のご法主になられた作家寺内大吉さんと同じ同人誌『近代説話』で発表した方で、私もお話ししたことがあります。大河ドラマ「草燃える」の最終回、ご著書にあるように、一方は権力の頂点にあって心の地獄を見ている、一方は人生転落の末、心の悟りに到達する。この対峙、いいじゃないですか。ところで鎌倉には浄土

宗三祖良忠上人が入られて、いまの大本山光明寺を開かれるんですが、実は二祖鎮西上人と三祖を引き合わせた僧がいるんです。その僧の名が生仏。琵琶法師生仏と同一人物かは、まだ研究が進んでいませんが、面白い符合を感じますよ。

T 今年、テレビで日本にある世界遺産を訪ねる仕事をやっておりまして、決まったところだけではなくて候補地も何カ所か回りました、先々週くらいかな、丁度鎌倉に行っただけですよ。鎌倉が世界遺産に申請しているんだけどなかなか決まらない。実際見てみると、建物とか、決定的に量が少ないですよ。日本最初の武家社会が魅力なわけですが、証明する武士の家なんかもないんですね。素晴らしい文学館とかはあるのですが、世界遺産としてはどうなんだろう。自分でじつくりと改めて鎌倉を見たときに、やっぱり魅力があるのは鎌倉五山ですよ。禅宗の寺。どうしてあのようなものが鎌倉に現れたのか。僕は祐之という役を通して、鎌倉の歴史の生々しさを知っているわけですよ。凄いですよ。武士集団なんというけど、やくざの闘争ですよ。プロフェッショナルの闘争の訓練をしたやくざがギラギラの鎧をつけて、正面切つての戦いの前に、その裏の駆け引き、だまし討ち、ここまでやるかという、騙すし裏切るし、凄いですよね。あまりにも多くを殺めすぎてしまった。一度政権を取ると共に戦った三浦とかが、邪魔になつてくる。これを滅ぼすときのやり方なんていうのは凄いです。ドラマでもできなかったんですけど、だまし討ちされた方は「怨みを残せ。これほど酷いことをするか」って、自分の顔を刀で切り落として、誰かわからなくしてから腹を切つて死んでるんです。全員。絶対にお化けは出たでしょう。天下を取ったといっても安心なんかしてられない。怨念の世界。

S BSフジ「時を紡ぐ旅」という副題のついた「日本遺産物語」という番組に、案内人というか旅人として出演されているんですね。それで古都鎌倉にはなにか血腥い歴史を感

じた、と。

T とてもとても大変なところですよ。それで結局、武将達もなにに救いを求めているかわからない。そんなときに仏教に気づくわけですよね。最初、道元さんを呼んで禅を教えて欲しいといったときに、道元は断つちゃうんですよ。頭いいですもんね。絶対に権力には関わらない。殺すぞと脅かされても、きつと権力者に仏教は無理だと思ったんですよね。福井に帰っちゃうんですよ。そのあと、臨済の栄西上人が現れる。臨済は天皇陛下がスポンサーにいたりして権力と仲良くやる方法を知ってますから(笑)。結局、栄西は、鎌倉軍、鎌倉幕府の人を多く殺めてしまった罪悪感、恐怖感を知っているでしようし、五山を作る中で、仏の慈悲、許しを示していたのだと思う。建長寺は元々処刑場ですよ。鎌倉最後の新田義貞だつて裏切りですからね。京都に行くといつて、Uターンして鎌倉を滅ぼしてしまうわけですからね。稲村ヶ崎は裏切りの大ドラマがあった場所。円覚寺かな、中国の無学祖元を迎えて侵略者の蒙古軍の死者をも供養している。

S まさに怨念の古戦場。名将、名僧の織り成すドラマですね。

T そういう人間ドラマの中で五山は残った。建築様式が素晴らしいとか、歴史的に由緒あるとかで世界遺産に登録しようと言っても、あまり意味がないんじゃないかと思う。なぜかという、物も少ないし、あのどうにもならない時代、武将達の心を鎮める方法として取り入れられた仏教、禅、これこそがユネスコの文化遺産に相応しいんじゃないかと思うんです。ユネスコというのは第二次大戦を経験した人類が、二度と戦争を起こさないために、宗教、人種、政治、そういう世界の壁を越えて世界共通の価値観を探すことから始まった。戦争をなくす手段になるというのがユネスコですから、鎌倉に入った仏教は、まさにユネスコに相応しいという話を、まさに稲村ヶ崎でしてきましたよ(笑)。(つづく)



連 載

会いたい人 関 容子

野村萬斎

さん

1

撮影／小野田麻里



萬齋さんは本業である狂言師として「狂言ござる乃座」を主宰する以外に、いったいいくつの顔を持っているのだろう。

舞台俳優（それもギリシヤ悲劇、シエイクスピアから井上ひさし、三谷幸喜まで多岐に渡る）であり、世田谷パブリックシアターの芸術監督であり、時に演出家でもあれば、プロデューサーにもなる。また映像の世界でも、映画やテレビドラマに主演しているし、近ごろは母校東京藝術大学で日本の伝統芸能——特に狂言について講じていると聞く。

この多彩な活躍ぶりを私はかなり熱心に追いかけてきたつもりだ。

映画では黒澤明の『乱』（昭和六十年公開）のラスト近くでただ一人生き残る盲目の少年として登場し、強い印象を残したのが十代の萬齋（当時武司）さんだったことをあとで知った。

また、NHK大河ドラマ『花の乱』（平成六年）。萬屋錦之介、十二代目團十郎、少年

時代の海老蔵（当時新之助）などが出演していたので観ていたが、そこで細川勝元を演じる知的で凛々しい若者が、襲名直後の野村萬齋という狂言師であることを知り、はつきりと認識した。

しかし萬齋さんの名を全国的に広めたのは、何と言ってもNHK朝の連続テレビ小説『あぐり』の望月エイスケ役だろう。私は吉行和子さんとは個人的に親しくしてもらっているが、このドラマが放映されているころ、母上あぐりさんの御機嫌は最高で、和子さんと二人、帝国ホテルで御馳走になったことがある。その後、あぐりさんがぐんとお年を召されてからは、現実の亡夫エイスケ氏と映像のエイスケさんがすっかり入れ替り、「もう、ああいふハンサムな人だった、と思っちゃってるのよ」と和子さんから聞いている。

それからというもの、萬齋さんの出演するさまざまな舞台、狂言師として能会に参加する古典の狂言を私はずいぶん観てきたつもり



和泉流独自の大曲「歌仙」で野村万作さんと向き合う野村萬斎さん（右）。
世田谷パブリックシアター「狂言劇場その八」「歌仙」（2014年）撮影：細野晋司

だった（このことは後に書く）。

それが、つい先日（平成二十六年十一月）世田谷パブリックシアターで上演された『狂言劇場その八』で、萬斎さんの演じる小舞『蟬』を観て、まさに衝撃が走った。装束をつけて、おどけたりとぼけたりするこれまでに観た「狂言」と違って、この小舞には狂言の舞踊的要素がぐっと凝縮されている。すつきりした黒紋付袴姿の萬斎さんの身体能力が百パーセント生かされて、その敏捷な所作の美しさに圧倒された。

そこですぐに閃いたのが、萬斎さん自身による詩の一節（『狂言サイボーグ』あとがきにかえて）だった。

僕は狂言サイボーグ

差す手は空を切り

運ぶ足は水を滑る

胸が天を仰ぎ

頸が背中から真っ直ぐに伸びる

そのとき僕は跳ぶ

岩のごとく落ちるため

僕は聞く 観客の鼓動を

小宇宙にこだまする 放たれた声を

萬斎さんを立派な能舞台のある稽古場に訪ね、さっそく小舞『蟬』を観た感動を、この詩の表現を借りながら伝える。

白っぽい着付の萬斎さんと正面から向き合うと、なるほど長い頸が背中から真っ直ぐに伸びて、かなりのなで肩。これも御自身で言う「ブルゴーニュワインのボトル」のよう。

「今回の狂言劇場ではAプロとBプロとあって、僕は四つの演目に出ているのに、皆さん『蟬』がよかった、って言う。共演したところのある大駱駄鑑の女性舞踏家もそう言っていました。ほかの三つにあれだけ長時間全力をつくしてるのに、小舞はたった五分。五分で観た人がよかったと言うなら、楽なもんですね（笑）」

もちろんこれは言葉の綾というものだろう。

自らを「狂言サイボーグ」（改造人間）と称するほど、幼時から父野村万作師の厳しい特訓で鍛えられた成果があつた五分間に濃密に詰まっているのだから。

『蟬』は、形態模写の一つのアレンジですね。蟬の俊敏性を描写して、あの中で四回跳んでますけど、その中の二つは狂言的飛び方です。最初は、鴉が飛び来たつた……と、蟬をねらつて上からヒューツと鴉が降りてくるベクトル（加速度）を感じさせたいし、蟬が死んで地獄に落ちる件りは、落ちるために跳ぶのであつて、フワリと飛ぶわけではないですからね。地獄に落ちて蟬の羽衣を着て、つくつく法師となりにけり……と洒落た結末がついているところがやっぱり『舞狂言』だからです。私は観世流の浅見真州師（まさくに）や中森貫太師の能会に何度も通い、萬斎さんの狂言をたくさん観ているが、かつて『蟬』のような生きのい

い「小舞」には出遭わなかつた。お年を召した能役者のお義理のような「仕舞」にはよく出遭つて、ちよつと迷惑することはあつても。「舞狂言」というのは、お能のパロディーとしてその形式を借りつつ狂言らしさを盛りこんだジャンルの一つですね。普通の能会では出にくいです。よほど御所望があればやりますけどね。

仕舞だつて、別にお年寄りばかりが静かに舞うばかりじゃありません。若いのがキリリと舞うことだつてありますよ（笑）

でも、あのように跳ぶところはないのでは……。海外公演の多い萬斎さんだが、『蟬』をたとえばフランスに持つて行つたら、詩的なエスプリを好む民族ゆえに、絶讃されるのではなからうか。

「いや、だめでしょう。日本人のように岩にしみ入る蟬の声とか、蟬しぐれとかに情緒を感じている民族とは違いますから。実際に、フランスの蟬はタワシをこすつたようにうる

さいですからね。虫の音は雑音にしか聞こえないんですよ。文化の違いでしょうね。蟬は七年間も土の中にいて、地上に出てわずか一週間足らずしか生きられない。そういうことへの思い入れがあるかないかの文化の違い。まあ、一概にそうとばかりは言えないけれども」

しかし、狂言の色彩豊かな衣裳をつけない、黒紋付袴姿の小舞は、舞う人の身体性をはつきりと際立たせる。歌舞伎の名優の素踊りの名品に魅せられるのは、中味の人間性の豊かさかはつきり見えたときだと思う。その意味で、萬齋さんの小舞の充実した五分間は、必ずや異文化の人たちにも理解されると私は思う。

「そう言えば父も『釣狐』を、衣裳をつけずに袴で演じたりしてましたね。

たしかに衣裳を着ないと身体性が強調されます。衣裳を着るとそれに任せてしまう、頼ってしまうことがある。袂が大きいだけで、

空間が埋まりますからね。紋付だと布地が薄手でしなやかですから、腕の動きをかなり意識しないと形にならないことがある。デッサンの強さみたいなのがはつきりわかるかもしれません」

「舞台芸術としての狂言」と銘打った『狂言劇場』で、萬齋さんの身体能力に感嘆した演目がもう一つあった。能楽囃子『越後簀——祝言之式』。越後から簀入りに来た若者が、酒宴でめでたい獅子の舞を披露するのだが、ここでの目を見張らされるアクロバティックでみごとな倒立と開脚。その写真がチラシに載っていて、観客はそれに惹かれて劇場（世田谷パブリックシアター）へと足を運ぶ向きもないとは言えない。

「十一月一日初日で八日が楽日だったんですが、その日は朝からめまいがして、お医者に倒立は止められていたんです。でもこれに代わって観客を満足させられる型は他に思いつ

「越後婦 祝言之式」で見事な倒立開脚を披露する野村萬斎さん。
世田谷パブリックシアター『狂言劇場その八』『越後婦 祝言之式』（2014年）撮影：細野晋司



かなかったので、思い切ってやってしまいま
した。赤頭がしらに赤い布の覆面で、三方にかかる
橋懸りのうち、正面奥から登場するのが、永
遠の闇の向うから通じてくる感じがあって、
いいでしょう。これもパブリックシアターの
舞台機構を十分に生かした演出なんです」

能舞台の橋懸りは下手鏡しもての間まから舞台へ斜
めに掛け渡した、屋根と欄干のある通路だが、
ここ狂言劇場では左右と奥に三本の橋懸りを
持つ。

このことによつて、狂言に演劇的な立体感
をもたらす演出が可能になったと言えるだろ
う。

そして、ドラマとしての狂言の面白さは
『歌仙』の舞台に結集した。

『歌仙』は、柿本人丸、僧正遍昭、在原業平、

小野小町、猿丸太夫、清原元輔の六歌仙と、和歌の神様、玉津島明神への参詣人との七人が登場人物（因みに、歌舞伎の「六歌仙」は、遍昭、業平、小町は同じだが、あとは喜撰法師、文屋康秀、大伴黒主）。

幕があいて、絵馬から抜け出した人丸以下の六歌仙が酒を汲みかわし、月見の宴を始める。舞台奥の影絵の人物たちが徐々に動き出す場面は実に幻想的。

「オーソドックスな狂言だと、演じ手の個性なんか言っちゃられないんですが、『歌仙』のように役者の個性を選ぶ曲もないわけじゃないんです。役と狂言師の相性がいいと成功します。初めて演じたときは、僕が人丸で父が遍昭だったんです。したらあまりしっくりいかなかった。人丸は年長で、六人の中の親分格ですから歌聖としての品格もなくちゃいけないし、俗っぽくちゃいけない。一方の遍昭はまだ若くて女性への関心も強い。それで次に、役を逆にしてみたら、バランスよくい

きましたね。今、父がいて、僕がいて、配役の妙が成り立つときに、『歌仙』はやりどきだなあ、と思いましたのでね」

まさにその通り。紅一点の美女の小町が誰に自分の盃を「思い差し」するかで、五人の歌仙は心穏やかではない。人丸が小町を、十二単衣の用意があるなどと言って誘惑するあたり、万作師の洒脱でゆつたりとした舞台からは微醺漂うように客席は陶然となった。小町の盃は遍昭に差される（歌舞伎の僧正遍昭は老人で小町にもてない）。

私はずいぶん萬斎さんを観てきたつもりだったのに、今回それが氷山の一角だったことを知った。

そしてこれから、かねて観たかった萬斎さんの『MANSAIボレロ』の、新しいバージョンとして発表される『MANSAIボレロ／転生』の舞台に接して、さらにショックを受けることになる。

（この項つづく）

その国土には、須弥山しゅみせんおよび金剛鉄圍こんこうてつゐ、一切の諸山しよせんなく、また大海・小海・谿渠井谷けいとしょうこくなし。佛神力の故に、見んと欲すればすなわち現ず。また地獄・餓鬼・畜生、諸難の趣なく、また四時、春秋冬夏なし。不寒不熱にして、常和調適じやうわてうてくなり。

〔仏説無量寿經〕卷上

無量寿仏（阿弥陀仏）の世界（極樂浄土）には須弥山や鉄圍山などの山や山脈はまったくなく、また海洋や湖沼や溪谷や窪地などもない。とはいえそれらを見たいと望めば、その仏の不可思議な力によつてただちに出現するのだ。またさらに、そこには地獄や餓鬼や畜生などといった悪しき迷いの境涯もない。加えて春夏秋冬という四季もなく、暑からず寒からず常に快適で心地よい。

境目をくつらず

（浄土宗総合研究所編訳『現代語訳 浄土三部經』参照）

「雪と雨の境目がある」などと言って、ピンと来るだろうか。長野市に住んでいると、そんな情景に遭遇する。もっとも多くの人には雪と雨の境目を時間軸で想像するだろう。昼から夜、夜から夜明け前へと気温が下がり、ある気温を境目に雨が雪へと変化する。しかし、時間軸とは別の境目がある。標高である。上下の空間軸に交差する横一線の境目だ。

私が住む長野市は、じつは全国の県庁所在地の中でも最も標高が高い地点とされている。長野駅が標高三六〇m、市役所が三六二m。しかし注目すべきは市街地の標高差である。長野駅から信州善光寺を境とする中心市街地は南北に約二Kながら、善光寺の標高は四〇五m。標高差、実に四五m。一〇〇m上があれば〇・六五℃下がるというから、同じ時刻であっても善光寺は長野駅より〇・三℃は低いことになる。しかも善光寺に近くなればなるほど勾配が急になるから、その温度差は善光寺の近くで一気に生じてくる。善光寺の北側はもう山である。なだらかな山の裾野と見上げる山と、中心市街地はそこを境に二分される。〇・三度という温度差はそうした風景をなぞるように、街を真っ白な雪景色と雨に沈む鉛色とに分ける横一線の境目をしばしば出現させるのである。

ところで数年前、信濃町で一人暮らしをしていた遠縁にあたる老婆が娘の嫁

ぎ先である長野市に移り住んだ。大黒柱の息子を事故で亡くし、住み慣れた土地を去ることになったのだ。善光寺から北へ約二五KMの信濃町は信州でも豪雪地帯として知られている。「是^{これ}がまあつひの栖^{すみか}か雪五尺」と詠んだ一茶の故郷でもある。冬となれば毎日が雪との戦いになる地域のこと、男手なしでは暮らしにくい。そこに住み続けるか否か。逡巡の末、老婆にとって男手の有無がその境目となった。愛着のある土地を離れる。切ない、苦渋の決断であつたに違いない。

地方における高齢化と過疎化の対策が叫ばれて久しい。あるいは少子化の進行は消滅可能性都市などという述語も生み出した。いずれも大きな社会問題だ。しかし、その土地を離れる者には、離れるだけのきっかけ、境目がある。

平成の大合併を経て長野市も周囲の町村と合併した。昨年十一月の長野県神城断層地震では長野市や白馬村、小川村の被害が報じられたが、同じ長野市内でも合併前の旧町村地区は震源地に近く旧市内より大きな被害が出た。いずれも山間地域である。雪も少なくない。この地震を境目に、旧町村から子どもたちの住む旧市内に移り住む高齢者もいると聞く。そこで暮らし続けていくだけの気力、体力を慮^{おもんばか}つてのことだろう。そこにもまた苦渋の決断があるはずだ。

經典によれば極樂には厳しい季節はなく、常に過ごしやすいという。降り積もる雪も灼熱の太陽もないのだろう。あるいはまた高い山も深い海や湖沼も急峻な谷や窪地もないという。行く手を阻むものは何もなく、どこへでも楽々と往来がかなうということだろう。暮らしやすいのだ。

極樂は阿弥陀仏に具わる功德によって彩られている。阿弥陀さまはご存じなのだ。どれほど愛着のある土地であろうと、過ごしにくさ、暮らしにくさがその土地を離れる要因となることを。阿弥陀さまは分かっておられるのだ。住み慣れた土地を離れることの切なさ。だからこそ阿弥陀さまは極樂世界を建立する際、過ごしたり暮らすには厳しい大自然を一切持ち込まなかった。そこを離れ去る境目となるからだ。これ以上、苦渋の決断を経験させたくはなかったのだらう。

とはいえ、そうした大自然でも、見たくなれば見せてあげようというのがまた阿弥陀さまの御心だ。誰だって住み慣れた土地の風景は愛おしいのだから。

(浄土宗総合研究所 袖山榮輝)

蓮

門

句

会

勝崎裕彦

(東京新宿・香蓮寺)

涅槃図を仰ぎて仕舞うひと日かな

道草に夢を託して彼岸前

彼岸会や波羅僧掲諦と呼び掛ける

山崎龍道

(熊本天草・遣迎寺)

灯標の小舟に点る常楽会

巡礼のここは寝釈迦の法然寺

巡礼をここに打止め寝釈迦かな

テーマ 《涅槃会・彼岸》

行正明弘

（福岡糸島・正覚寺）

巡錫の島の別れや涅槃ねはん西風にし

涅槃西風宗祖遠流の島は指呼

打ち窪む魚鼓歲月の彼岸告ぐ

佐山哲郎

（東京根岸・西念寺）

稜線の山気寝釈迦のごとくあり

涅槃図にせんだみつお似友近似

大釘に掛けるものなく彼岸ひがんにし西風

御宿とメキシコを結びつけたもの

友好の絆

第九回

森清鑑

ロドリゴ帰国の旅へ

無事、駿府に戻ると、ロドリゴは再び大歓迎を受ける。それから、数ヶ月も駿府で過ごす。家康に再見。豊後臼杵^{うすき}への道中で、手厚い接待を受けたことを感謝。そしてサン・フランシスコ号と同時航海で臼杵に漂着した老朽船、サンタ・アナ号の様子を見て、この傷んだ船では、帰りの太平洋横断は無理と報告。家康は、従前通り、わが船を提供するから安心しろとロドリゴに応える。

さらに、家康とロドリゴは、日本とスペイン（エスパニーニャ）、ヌエバ・エスパニーニャとの通商を開く、具体策を検討。テーマは、ヌエバ・エスパニーニャからの鉱山技師派遣、その精錬報酬、港の開港、信教の自由、オランダ人の日本からの追放等々である。

オランダ人の追放は、彼等との通商取り決めがあるので、今は、できない。しかし、それ以外の議題は、大いに発展させようではないか、と家康は応える。家康はロドリゴという人物を信頼している。ロドリゴもまた、助けられた家康に今や畏敬の念さえ持つている。こうしてロドリゴはスペイン国王、ドン・フェリーペ三世に国交を開く趣意の上申書を送ることになる。

結果、家康は、新たに国交を結ばんと、その友好の証に、まずは国王に使者を派遣し、献上品を贈ることを決める。誰が良いかと家康。そしてロドリゴは、この使者の役目に、彼と親しいパードレ・ムニョス（神父、日本で同行）を選ぶ。その後、ムニョスは、一六一〇年十一月、マドリッドに着き、家康と秀忠の書簡と贈り物を国王に届けることになる。スペイン国王は直ちに会議を開き、毎年一隻の商船をアカプルコから浦賀に渡航させることを決め、国書と贈り物を使者達に持たせる。

家康は、正式にウィリアム・アダムスが建造した船をロドリゴに与え、さらにヌエバ・エスパニーニャ（メキシコ）帰国に際する、必

要準備金として四千ドウカド（現価約三千万円と推定）を提供。「以上のような厚遇を大御所は与えて下さり、江戸城の將軍に再び会うよう命じられました」とロドリゴは記す。

そしてロドリゴは家康の指示通り、江戸に向かう。將軍秀忠と再見。秀忠は、必需品を初め準備万端、調える。こうして大多喜城下に残っていた遭難船員は、各自の意志に従い、大半が長崎からヌエバ・エスパニーヤ（フィリピン）ルソン島に帰ることになり、メキシコ希望の船員は、ロドリゴとともに、アカプルコに帰ることになる。

帰国の日がやって来た。ロドリゴは浦賀に行く。船を造った、ウィリアム・アダムスと再見。大多喜以来の友好を温める。そしてついに船は、一六一〇年八月一日（慶長十五年六月十三日）浦賀を出港した。

家康から贈られた百二十トンの外洋帆船をロドリゴ達は幸運に恵まれるよう、サン・プエナビントウーラ号と名付ける。浦賀を出港

した船は、次第に日本本土から離れていく。甲板に立つロドリゴは、次第に遠ざかる、富士を見続けている。ロドリゴの胸中には、これまでの出来事が走馬燈のように駆け巡る。

まるで夢のようである。あの途方に暮れ、死を覚悟した御宿での遭難。冷え切った身体を温めてくれ、食べ物を恵んでくれた、村民のありがたさを思い出し、思わず、涙する。そればかりか、大多喜の殿の厚遇を得、家康、秀忠の計り知れない扱いに接する。江戸、駿河、京都、白杵への旅を通して、遭難という不幸な出来事から、はからずも、初めて接することになった日本の文化、そしてこの国の人々の温かい持てなし、歓迎。ついには、国交の端緒を開く、大御所、家康との交流。全てが走馬燈のように胸に去来する。「帰国の太平洋船旅は、過去に経験したことのない幸せに満ちあふれた航海であった」と記す。

船には家康の意向を伝えるに本国スペインに赴く、パードレ・ムニョスも乗っている（メ

キシコ経由でスペインへ）。しかし、それだけではない。なんと、京都の商人、田中勝助、朱屋隆成、山田助左右衛門等、日本人二十一人も乗船していたのである。必然的に彼等は初めて太平洋を横断した日本人となった。

ロドリゴはヌエバ・エスパニーニャ（メキシコ）に帰ると、日本見聞録の執筆に取りかかる。微に入り、細にわたった、膨大な記録。

ヌエバ・エスパニーニャの返礼

ロドリゴ帰国翌年の、一六一一年、スペイン副王、ルイス・デ・ベラスコは、セバスチヤン・ビスカイノを特使として日本に派遣する。三月下旬にアカプルコを出港し、六月十日浦賀に入港する。この時、ロドリゴと一緒にメキシコに渡った日本の商人達もラシヤ、ビロード、葡萄酒などを買い入れて、帰国している。ビスカイノは、早速、家康、秀忠に謁見。ロドリゴ達に提供された船の代金や借入金を返済。加えて、遭難船員厚遇へ

の謝意を改めて伝えるべく、西洋式置時計を家康に贈答。この西洋式置時計こそが日本に伝来した、初めての機械仕掛け、ぜんまい式の西洋時計となる。時計は、その後、家康の最初の墓所、久能山東照宮に収められ、現在も記念館に保管されている。

西洋式置時計

二〇一四年五月、産経ニュースで次のような記事が発表された。「一六一一年スペイン国王フェリーペ三世から徳川家康に贈られ、静岡市久能山東照宮で保管されてきた西洋時計のレプリカ製作が始まった。この時計は国の重要文化財。部品の摩耗を防ぐため、これまで作動させずに保存されてきたが、レプリカで当時の機能や動きを再現し、一年後に一般公開される予定。実物を分解して詳細な設計図を作り、来日している、ロンドンの古時計専門職人、ヨハン・テン・ヒューブ氏が英国に持ち帰り、完成させる。この時計の高さ

は二十一センチメートル、幅十センチメートル。真鍮製。実物は、一五八一年スペイン、マドリードで作られ、当時の国王が愛用し、一六〇九年御宿沖で難破したスペイン船乗組員を手厚く保護して出国させた、お礼に寄贈されたもの。世界で二十数台現存する当時の西洋時計は修理などで部品が取り換えられたケースがほとんどだが、東照宮の時計は当時の部品が残っている上、摩耗も少ないという」。

ビスカイノは、貿易開始の準備と遭難防止のための海岸測量の許可を願い出る。家康、秀忠は、それを許す。彼は仙台に赴き、陸奥の海岸から房総までの測量図を作成し、家康、秀忠に贈呈。役目を終えたビスカイノは、一六二二年九月に浦賀から帰国の途につき、暴風に遭遇。結局、十一月、浦賀に引き返すことになる。

ビスカイノの船は嵐のため破損しており、太平洋横断には使えそうにない。そこで、やむなく新しい船を造る資金援助を家康に嘆

願する。しかし、家康にしてみれば、またかという思いがあっただろう。彼の目はロドリゴほど気に入っていないということもある。それにこー？二年の間に、政情は大きく変わっている。特に、スペインには侵略の意志

があり、金銀の探検が本当の狙い、とオランダ人が吹き込んだことも影響している。スペイン国王からは何も音沙汰ないし、家康は迷う。そこで手を差し伸べたのが、伊達政宗である。キリスト教に関心を持つ彼は、自前で造った新造船「まつまる」の提供を家康に申し出る。家康は喜び、この案を呑む。結局、ビスカイノは、この船でメキシコに帰国する。彼等はこの船をサン・ファン・パウティスタ号と名付け、一六二四年一月に出港した。しかし、この年は、大きな転換期を迎えていた。それというのも国内では、豊臣を一掃すべく、大阪城攻め、すなわち、大阪冬の陣が始まる。すでに実権は掌握しているのだが、家康は未来に向けての、完全な平和体制を築

くべく、非情とも言える挙に出たのである。

支倉常長

そんな日本の国内事情は知らず、ビスカイノの船は航海を続けた。そして、歴史上、興味深いことに、この船には、伊達政宗配下の支倉常長^{はせくら}達が乗っていた。支倉には、スペイン国王フェリーペ三世及びローマ法王パウロ五世に会うこと。すなわち、交易を開始すること、そのためにはキリスト教伝道師の派遣を許す旨を伝える役目が託されていた。世に言う支倉使節団は、日本ですでに布教活動していたルイス・ソテロ神父を初め、武士六十名、商人百三十名で構成されていた。彼等は、ヌエバ・エスパーニャ（メキシコ）經由で本国スペインを訪問する計画である。この伊達政宗による、支倉使節団派遣の背景には、恐らく家康との打ち合わせがあると思われる。とにかくにも、ロドリゴの御宿遭難は、日本史の上で、新たな頁を開く出来事へ

と展開していく。

メキシコに着いた一行は、大歓迎を受ける。副王自らが警護部隊を派遣。メキシコ市まで警護させる。そこで大規模な歓迎の宴が催され、主だった高位聖職者、官民代表者がごぞつて彼等を接待。このようなことは、スペイン人の遭難救助と厚遇に対するヌエバ・エスパーニャの感謝の証である。

そして、アカブルコ到着から四ヶ月後、支倉以下約二十名がベラクルスからスペインへ向けて出港する。ちなみに、使節団以外の者は、初の海外体験後の翌年、同じ船（サン・ファン・パウテイスタ号）で日本に帰国している。一方、支倉等は、一六一四年十月、スペインに到着。無事、フェリーペ三世に謁見する。皇帝は温かく迎える。その後、両国の交易に賛同する法王パウロ五世に会うため、ローマへ赴く。無事、法王との会見に成功した後、彼等は、再びマドリッドに帰った。ところが、この僅か数ヶ月間にスペインの接待

状況は一変し、最早、冷遇に近いものとなっていた。このスペイン側の変貌は、「日本では、キリスト教信徒の迫害が始まっている」との知らせを受けていたためである。あせつた支倉は、その後も、二年半にわたり、粘り強く交渉を重ねる。しかし、結局は、断念。ヌエバ・エスパニーヤ（メキシコ）に戻る。そして一六一八年に、マニラ向けのスペイン船に乗り、帰国することになる。

スペイン本国の対応

ヌエバ・エスパニーヤに戻ってからのロドリゴは、日本との交易が遅々として進まないことにいらだつ。彼が日本に行った一六〇九年から数年の間に事態は大きく変貌していた。家康は大阪の役に明け暮れ、一方、スペイン、フィリッペ三世が日本に派遣した一行（宣教師含む）は、經由地、ヌエバ・エスパニーヤ（メキシコ）で滞留。メキシコ総督府は、国王に再考を促す始末。結局、交易案件

は除外。布教中心の国書に書き改められ、国王使節団は、一六一五年浦賀に着く。江戸に家康はいない。一行は大坂夏の陣からの帰還を待つ。そして、駿府で彼等と会うことになる。家康は、国書と贈り物を受け取ったものの、大いに不満であった。そこには交易のことが一切触れられていなかったためである。銀の精錬技師派遣のことも立ち消え。これについては家康の方にもある裏事情があった。ロドリゴと会見の一六一〇年、家康は金銀採掘で極めて優秀な官僚、大久保長安に命じ、石見銀山を開拓させ、成功。だが、一六一三年、大久保長安の死去にともない、横領罪の嫌疑が持ち上がり、家康は長安を断罪する（長安事件）。こうしたこともあった、翌一六一六年に家康は病に倒れる。そして、異国の侵略を恐れた幕府は、次第にキリシタン迫害を強め、ついに三代家光の時、完全な鎖国令が発せられる（一六三八年）。もし家康が健在であつたならば、この時、異国との交流関

係をどのように処理していたであろうか。

両国の信頼関係は続く

これで両国の関係は完全に消滅。永遠に終わったかのように見えた。しかし、日本とメキシコ・エスパニーニャとの信頼関係は、完全に途絶えることはなかった。一七三八年には、メキシコ・エスパニーニャで、スペイン語で書かれた日本語文典が発行され、一八四一年には、日本の船が嵐に遭遇して漂流。エスパニーニャの密輸船に拾われ、数名がメキシコ滞在后、日本に帰還。それぞれの体験記が著され、鎖国下にあつて、海外事情を知りたい日本の知識人にとり、貴重な情報源となつた。一八一〇年九月十六日は、メキシコの独立記念日。この日、メキシコ・エスパニーニャは、スペインから独立すべく十年戦争を起こす。そして一八七四年には、メキシコは「金星の太陽面通過」観測の最適地として日本を選び、大統領自らが天文学者の日本派遣を決定。横浜と野

毛山を観測基地とする。明治政府もあらゆる便宜を供与した。観測は大成功を収め、翌年、メキシコは、世界の先進国に先駆けて調査報告を発表し、大反響を呼んだ。しかし何といつても、家康とロドリゴが築いた信頼関係の復活を示す出来事が一八八八年（明治二十一年）に両国で取り交わされた「墨日修好通商航海条約」である。これは、英国、フランス、ドイツ等との条約と異なり、日本にとつて初めての完全な平等条約であつたからである。それは、お互いに歴史の感謝を秘めて友情と信頼に支えられた取り決めであつた。改めていうまでもなく、家康とロドリゴの親交に端を発した両国の友好関係は、ここに大きく結実する。ロドリゴの御宿遭難と家康の大きな対処は、四百年後の世界に生きる。ロドリゴ以来、それまで皆無であつた太平洋横断の行き来が始まる。彼は宗教的布教に偏らず、両国の自由貿易の必要性を最初に主張した、スペイン人だったのである。

（つづく）

【参考資料】

「ロンロドリゴの日本見聞録」安藤操書 谷口書店
「条約から条約へ。墨日関係史ノート」メキシコ大使館。翻訳官アニーバル上原。
「ドン・ロドリゴの幸運」小倉明 文芸社

小説 快僧渡辺海旭

壺中に月を求めて

前田和男

第五十六回

第二部

ライン
来江の古城遥かなり

盟友・荻原雲来 その6



★前号までのあらすじ

時は明治の中葉。家業が傾き寺に出された渡辺芳蔵は小石川源覚寺住職端山海定の下、十五歳で得度し「海旭」を名乗る。才気煥発ゆえ将来の宗門幹部として浄土宗学東京支校、同本校へ進学を許され、さらに明治三十三年（一九〇〇）、浄土宗海外留学生として、廃仏毀釈で打撃を蒙った仏教再生の興望を担って、当時印度学の拠点であったドイツはストラスブルク大学へ留学。碩学ロイマン教授の薫陶を受ける傍ら、キリスト教改革派、社会主義者らと交わり、社会福祉事業など仏教以外の知見を深める。留学四年目、スイスはバーゼルの万国宗教歴史学会で研究発表、そこで仏教に造詣が深いオーストリアⅡハンガリー帝国元駐日代理公使クーデンホーフ・カレル・ギー伯爵と出合い刺激を受ける。ストラスブルクに戻った「半年先輩」で同じ宗門海外留学生の萩原雲来から、ヨーロッパ初の比丘であるニャーナティロカ存在を知らされ強い興味を覚える。一方、当初の留学期限が切れ何とか延長を許されるなか、雲来はケンブリッジ大学の蔵書から仏教聖典「瑜伽論」菩薩地の原典を発見する快挙をなし博士号取得、ついに帰国の途につくことになった。海旭にもそろそろ成果が求められていた。

雲来は東郷平八郎、
海旭は軍神広瀬武夫!?

印度学の泰斗ロイマン教授の下で共に学んできた萩原雲来が博士号を取得、目出度く帰国の途につくことになり、大学前の馴染みのレストラン「ゲルマニア」で歓送の祝宴が張られたが、ロイマンも渡辺海旭も嬉しい反面、雲来との別れが辛く悲しかった。二人ともに、宴がたけなわになるにつれ、胸中に嬉しさより悲しみをつのらせた。

海旭は自身の悲しみを振り払うと、口元にわりやり笑いをつくった。

「先生、ラギワラの帰国は残念でしょうが、日本にとつては、大いに喜ばしいことですから、大乗的に見てやってください」と言つて、ビールをロイマンのグラスに注いだ。「わが日本は、ヨーロッパ各国とくらべると、残念ながら、大学者は未だ出ずです。理科や医科では、二年前までここにいた足立文太郎の軟

部解剖学のように、ようやく世界に通用する研究者が出てきたようですが、国と国民の文化と精神の基になる哲学、宗教、芸術となるとお話になりません」

「そこで、われらがヲギワラというわけか……」とドイツ人の研究仲間が言った。

「そのとおりだ」と海旭は大きくうなずいた。「彼の六年間の蘊蓄、精錬した學術をもつてすれば、わが日本の精神文化を盛んにすることができ。これをもつて日本は大いに學術文化を挽回し、その精華を世界に公表して恥ずかしくないどころか、胸をはって訴えられるというものだ」

ロイマンがうなずくのをうけて、イギリスからの留学生が言った。「それは日本にとって結構なこと、ご同慶のいたりだが、きみはここストラスブルクに残って、さみしくないか。いやさみしいだけでなく、いろいろ困るだろう。いっそ一緒に帰ったらどうか。ヲギワラに帰国されたら、もうきみを助けて

くれるものはおらんぞ」

歓送会の参加者がいうように、この雲来にストラスブルクを去られると、もう海旭を教え諭してくれるものはいなくなる。さあ、どうしたものか……

海旭はかぶりを振って「彼は彼、吾は吾だ」とつぶやくと、それを聞きつけたフランスからの留学生が、海旭にビール酌をしながら、「おい、なにかいったか」と訊いたのに、「いや、なんでもない」と受けて、話題を雲来の帰国にもどした。

「要は、英国のネルソン提督、ドイツ帝国のモルトケ將軍のような傑物になってほしいのだ。いや、ヲギワラならなれるさ」

ここまでニコニコと話を聞いていた萩原雲来が、慌てて口を挟んだ。「おいおい、ワタナベ、きみはあいかわらず、人を脅かすのが得意らしい。坊主のくせに戦争や軍隊をたどえに出すとは……」

「なに、かまうものか」と海旭は答えた。

「そうか、いくら偉人でも異国人にたとえられるのは不本意か。だったら、もっとよいたとえをいおう。いいか、ヲギワラの帰国は、いつてみれば、今般のロシアとの戦いで殊勲第一等だったわがトーゴー司令長官率いる連合艦隊に英国はイングランドの造船所で建造された新鋭の一大甲鉄艦を新たに迎えるようなものだ」

「これはこれは、わが大英帝国をご指名いただきありがとうございます」とイギリス人留学生が言って、参加者の笑いを誘った。「きみは、ロシアとの開戦前は、盛んに対露主戦論をぶちあげてみなの驚かせたが、ますます意気盛んだね。で、ヲギワラがわが英国仕込みの一大甲鉄艦だとして、きみはどうなんだね」

海旭はしばらく考えこんでから答えた。「僕はしよせんは泥船、破れ船だが、ヲギワラを旗艦とする荣誉ある艦隊の末端に列なつて、いつかは閉塞作戦のときの棄て船の御用

をつとめるときもくるだろう」

「ほう」とイギリス人は言った。「ヲギワラがトーゴーなら、ワタナベは旅順閉塞作戦で軍神になったヒロセ中佐というわけか。いずれにせよ、棄て船になるということは、ワタナベ、きみも近々帰国することかい」
「いやいや、まだ、ヲギワラのように博士号をいただいていないし……」

と、ロイマン教授が眼をかがやかせて言った。「それは、いい。ぜひとりたまえ。ワタナベ、きみは、ヲギワラ以上に肩書きを求めないところがある。主任教授としては、うれしい申し出だ」

しまった、と海旭は思ったが、撤回するわけにもいかず、「ヲギワラのような学究一途でないので、まずむりかと思いますが……」と答えを濁した。

するとロイマン博士は、「なにをいう」と語気をつよめた。「私は、君を学者として大いに評価している。ヲギワラはこつこつやる

タイプだが、ワタナベは発想がひらめくと切れ味が鋭い。どっちも棄てがたく、そんな対照的な弟子をもったことを私は誇りに思っている」

海旭は感激して、言葉をつまらせながら答えた。「ありがとうございます。なんとかロイマン先生の期待にそえるように頑張ります」「ロイマン先生を失望させないためには、もうちょっと酒を控え、議論を控えることだな」と珍しく萩原雲来が半畳を入れて、一同大爆笑となった。

「君たち二人は補いあって実によい組み合わせだ。日本に帰ってからもいつまでもその補の関係をつづけてほしい、これが私の願いだ。さあ乾杯しようか」とロイマンは言い、一同、杯をかかげて唱和した。

「われらがラギワラの博士号と帰国を祝って、そして、われらがワタナベの博士号取得を祈って、乾杯！」

高らかな檄がレストランの天井高く響き渡

り、かくして萩原雲来の歓送会はお開きとなった。

雲来の大歓迎会が東西で催される

一九〇五年（明治三十八）八月、萩原雲来は帰朝に当たって次のような決意を、故国の宗門の機関紙「浄土教報」に書き送ると、イタリヤはジェノヴァから船に乗り、六年前の往路とは逆のコースで帰国の途についた。

「小納殆んど六年に垂んとする歳月の間、主として南北仏教の研究に力を竭し、其源泉たる聖典原本の研究に従事致居候。尚、帰朝後には西蔵経典をも対読し得る様致度、現存せる世界の経文を比較研究し以て根本的に仏学界の薫蕕を弁折し仏学の大方針を講じ純聖教の顕揚の一助たらしめんとのみ竊かに希望する所に御座候云々」

六年にわたる留学で究めた南伝・北伝仏教

の原典研究を成果に、帰国後は西藏（チベット）聖典解説に邁進したいとの決意を披歴したものである。後に海旭も、船便で送られてくる「浄土教報」でこれを読み、いかにも研究一途な雲来らしいと改めて感心したものだった。

二か月の船旅で無事横浜に帰着した雲来は、大歓待を受ける。何よりも宗門中枢の称賛ぶりが破格だった。「浄土教報」にはこう記された。

「本宗の元勲たる黒田老師が僧中の獅子と称嘆して汎く宗侶に告げて以て大に之れを迎へられし萩原雲来師は悉達太子シツタルならねど、勤苦六年の功空しからずしてドクトル・オブ・フイロズファイ、てふ錦衣を纏ふて目出度帰朝せらる」

「悉達太子」とは出家前の釈迦の名。つまり雲来の留学の六年間は釈迦が修行した期間と

同じであるとして、仏祖と同格扱いしているのである。

さらに雲来の歓待ぶりは事細かに「浄土教報」に掲載された。まず東京では二度も歓迎会が催されたが、そのうち両国回向院でのそれは国賓待遇並みの遇され方であった。

いわく——来会者百三十名超。十五におよぶ祝歌・祝辞をうけると、成田屋良坊、三遊亭右円次の落語、奇天斎栄一の手品などの余興が座を盛り上げる。そして閉会では雲来を胴上げして一同で万歳を唱和。三々五々会場を後にする来客たちは、少年音楽隊の奏樂と、「歓迎」の文字を独英仏三か国語で描いた提灯で見送られるという絢爛けんらんぶりであった。

いっぽう京都大学でも歓迎会が開かれたが、こちらは東京の両国回向院に比べると対照的だった。

大学の門前には国旗と仏旗がぶっ違いに掲げられ、会場の講堂の中央には松と菊花の大きな活け花、天井の四周には日英米同盟国の

古き伝統技 三代にわたる信頼

有限
会社

浄土宗法衣専門

古島法衣店

〒111 東京都台東区元浅草4の2の1
電話(03)38421289
振替0018002145231

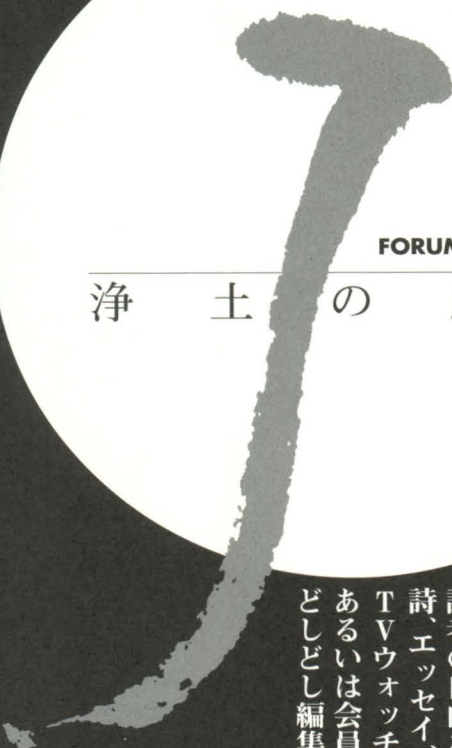
国旗、そして正面には菊の花で「歓迎」と描かれた大額面。この華美を廃した清楚一途な飾りつけは、前日学生たちが夜なべして手づくりしたものだった。

雲来が「梵語研究の価値に付て」の講演を終えて着席すると、総員起立して「君が代」三唱。ついで準備されたのは「一盃のビールに一個の林檎」の質素な祝宴。雲来はこれを良しとして「軽薄者流の酒池肉林の馳走に勝れる萬々なり」と学生たちをねぎらい、こう続けたという。「博士を讃美する世評あるも、これはドイツでは大学受験者の当然得る所に、何ぞ誇るに足らん」。この謙遜ぶりを

「浄土教報」は、「『下れば下る程人の見上ぐる藤の花』の観ありき」と評した上で、「師は談笑の間に彼の地の風土風習の特徴等物語られ、又余興としてバイオリン等もありて頗る盛会、主客歓を罄して時の移るをも知らざりしか、午後一時を報ずるに驚き、無事閉会したり」と結んだ。

海旭は、この京都大学の逸話についても「浄土教報」で読み、雲来の人柄がしのべれると大いに感得すると共に、辛い別れであった友の帰国を改めて喜んだのだった。

(この項おわり)



FORUM

浄土の広場

「浄土の広場」では

読者の自由な参加をお待ちしています。

詩、エッセイ、短歌、俳句、川柳、書評、映画評、

TVウォッチング、紀行文、その他創作等。

あるいは会員各寺院での催しの告知、報告など。
どしどし編集部にお寄せ下さい。

浄土誌上句会

● 習

〔特選〕
鼯鼠掛けて大学演習林

齊田 仁

夏の益獣が冬は害獣になってしまう。そこで
で罫を仕掛けることになるのだ。また演習林
では動物の生態観察のために罫を掛けること
も当然あるだろう。この句、そのどちらを取
るかは読み手の自由に任されている。

〔佳作〕
吹雪くなか少年がゆく習練場

佐藤 雅子

屠蘇祝う席で習いし軍歌かな

今道 拓郎

練習船冬波を割り湾出する

浜口 佳春

● 字

〔特選〕
すり切れし字典寒夜の炭匂う

石原 新

作句のために字引きの類は欠かせないが、
特によく使うのがあって、すり切れるまで放
せない。いまそれを使っているのだろう。傍

らの火鉢の炭火がふつと匂い、夜は更けて行く。さて名句はできたかな。

〈佳作〉

一の字がへの字に見える初荷かな

村松 芳郎

仮名文字に墨を薄めし寒の水

有坂 綾子

寄席文字の看板の淑気かな

遠藤 葉子

●自由題

〈特選〉

浅漬けを刻む妻居て傘寿過ぐ

井村 善也

使い続けている糠床があつて、いま妻が浅

漬けを刻んでいる。こういう生活が続いて八

十歳まで来た。「妻居て」には、妻のおかげ

でここまで来たという思いがこもっている。

浅漬けを刻む音が聞こえる。

〈佳作〉

洗濯物ぶらり下谷のお正月

小林 苑を

後頭部ばかり見ている初詣で

永作 舞子

独り鳴るホテルのピアノクリスマス

増田 信子



鍵財布自由題

浄土誌上句会の
お知らせ

兼題

誌上句会 〈編集部選〉

■習

煤払い社寺が伝える風習に
練習をしてつまらなき福笑い
習近平似の餅の浮く雑煮碗
冬天にボンと習志野空挺団
練習の好きな人ほど息白し
冬座敷京菓子の美を学習す

■字

一文字白さ際だつ直売所
看板の文字見え隠れ雨水かな
初春の裏浅草の梵字めく
雪かきの後には文字の震えけり

當間あさ子

工藤 掉

小林苑を

金井 楨

山崎浩一

内藤亜紀子

當間あさ子

佐藤雅子

井口 栗

内田愛子

締切・二〇一五年三月二十日

発表・『浄土』二〇一五年五月号

選者・増田河郎子（『南風』主宰）

応募方法

●いずれの題とも数の制限はありません。

●特選各1名・佳作各3名

●葉書に俳句（何句でも可）と、住所・氏名を必ずお書き下さい。

宛先

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館内
月刊『浄土』誌上句会係

円安の新年絵馬にロシア文字

戀文に舊字が三つ冬櫻

書き初めの終いの文字が羽目外し

大字も字も消えゆく年賀状

■自由題

朝夕に指にまとわる木の葉髪

一夜にて白一面の冬景色

ふと思いつか死ぬ身のこの身体

迎春や筆のはらいのはみ出せり

初夢に花魁ひとり侍らせぬ

目の前で烏賊がのされてゆく淑気

初東風や焦げが残りし銀杏の樹

寒水に汲みし寒水濃くなりぬ

七福神詣のおろしたての靴

安西虎太郎

斉田 仁

諸井 勉

谷口瑠美子

當間あさ子

佐藤雅子

飯島英徳

安藤由加里

斉田 仁

近田映子

長谷川 裕

吉田瑠璃

和田康作



かまちよろう先生作新聞四コマ漫画『ゴンちゃん』が各地方新聞に掲載されています。(静岡新聞・山梨日日新聞・北日本新聞
福島民報・宮崎日日新聞・新日本海新聞・神戸新聞・岐阜新聞・中国新聞・四国新聞)

風の風の音に犬が吠く

岱潤

基本的な話だが法然上人の教えは、お念仏は最高の善行であるので、極楽往生を強く願ひ、悪行をせず毎日お唱えすることによって極楽往生が叶うと説くのか、お念仏には最高の功德があるので、どんな悪いことをしていても、お念仏によって必ず救われると説くのか、時々意見が分かれるところである。

ある人は前者を浄土宗的だと言ひ、後者を浄土真宗的だと言ひ。しかしこれは両者とも法然上人の教えで、対機説法に過ぎないと思う。相手が一般人（前者）か僧侶（後者）の違いだと思われるから

だ。しかし教化で説くのに、鎌倉時代と現代では当然説き方が変わってくると思う。現代人に「悪いことをすると、地獄、餓鬼、畜生の世界に堕ちる」という説き方はどうだろうか、これでは釈尊が否定した輪廻を肯定し、バラモン時代に戻ってしまったのと同じと思われぬ。確かに子供の時、親から悪いことをするとそんな脅しを言われたことがあったかもしれない。しかし施本を読む大人に説く話ではない。ある大本山の刊行物の、今年の正月号の中にそんな文章を見つけ驚いてしまった。現代人は皆読み書きもでき、教養もある。ならば法然上人が僧侶に語った方の話の方が、興味があるの

ではないだろうか。法然上人が東大寺でエリート僧侶に語った、阿弥陀仏の譬え「一つの月が萬水に浮かぶ、水の浅深を嫌うこと無く」を、教化でも自然に説く時代になっていると思う。（長）

編集チーフ
編集スタッフ

長谷川岱潤

斎藤光道

佐山哲郎

青木照憲

村田洋一

浄土

八十一巻 一三月号 頒価六百元
年会費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷 平成二十七年一月二十日

発行 平成二十七年二月一日

発行人 佐藤良純

編集人 大室了皓

印刷所 株式会社 シーティーイー

〒一〇五〇〇一一

東京都港区芝公園四七四明照会館四階

発行所 法然上人鑽仰会

電話 〇三三三七八六九四七

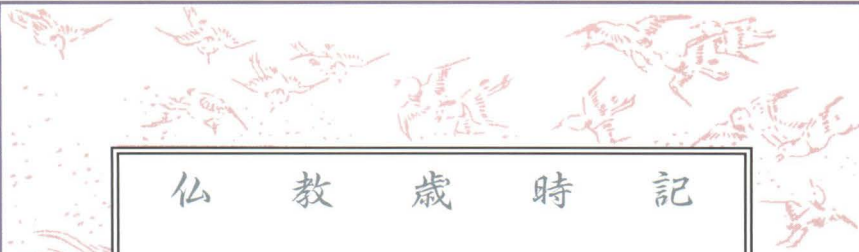
FAX 〇三三三三七八七〇三六

振替 〇〇一八〇・八・八二八七

雑誌『浄土』
特別、維持、賛助会員の方々

飯田実雄(駒ヶ根・安楽寺)
 麻谷勝正(目黒・祐天寺)
 魚尾孝久(三島・願成寺)
 大江田紘義(仙台・西方寺)
 加藤昌康(下北沢・森巖寺)
 加藤亮哉(五反田・専修寺)
 熊谷靖彦(佐賀・本應寺)
 桑原恒久(川越・蓮馨寺)
 佐藤孝雄(鎌倉・高德院)
 佐藤成順(品川・願行寺)
 佐藤良純(小石川・光園寺)
 東海林良雲(塩釜・雲上寺)
 須藤隆仙(函館・称名寺)
 高口恭行(大阪・一心寺)
 中島真成(青山・梅窓院)
 中村康雅(清水・実相寺)
 中村瑞貴(仙台・愚鈍院)
 野上智徳(静岡・宝台院)
 藤田得三(鴻巣・勝願寺)
 堀田卓文(静岡・華陽院)
 本多義敬(両国・回向院)
 真野龍海(大本山清浄華院)
 拙 博之(網代・教安寺)
 水科善隆(長野・寛慶寺)
 (敬称略・五十音順)

ホームページ <http://jodo.ne.jp>メールアドレス hounen@jodo.ne.jp



記 時 歳 教 仏

二月 涅槃会

釈迦が入滅したとされる旧暦二月十五日。追慕報恩のために行われてきた法会です。現在は二月十五日あるいは三月十五日に営む寺院もあります。涅槃とはサンスクリット語のニルヴァーナの音写で、貪欲（むさぼり）・瞋恚（いかり）・愚痴（無知）の三つの煩惱が消滅した状態、つまり悟りの境地を表します。

三月 彼岸

春分の日の前後各三日、合わせて一週間は春のお彼岸です。彼岸の最初の日を「彼岸の入り」といい、期間の中日を「お中日」、最後の日を「彼岸明け」といいます。彼岸とはサンスクリット語のパラミターに由来しています。悟りに至る修行を意味するパラミターは「波羅蜜」と音写され、「到彼岸」と訳されました。

迷いの世界（此岸）から悟りの世界（彼岸）へ到るという意味で、彼岸会は、悟りの世界へ到達するための法会ということになります。



ほとけの
慈悲は
いつの世にも、
誰のもとにも



石丸晶子先生の
本誌連載小説『法然上人を巡る人々』が
文庫本となりました。

法然。その光に出逢い、闇をこえ、
“あたらしいいのち”に生きた
貴族、武士、庶民たちの物語

月影の使者 上 下

●浄土宗出版 上下巻とも本体730円＋税

【問合せ・お求め】 浄土宗出版

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4

TEL: 03-3436-3700 FAX: 03-5472-4878 <http://press.jodo.or.jp/>